



タリタクム日本の今について

カトリック・タリタクム日本代表
シスター弘田 しずえ（ベリス・メルセス宣教修道女会）

カトリック中央協議会の再編成により、これまで社会司教委員会の難民移住移動者委員会のもとにあったタリタクム日本は、独立した任意団体として再発足することになりました。また、司教団から、日本カトリック司教協議会公認団体としての承認をいただき、松浦悟郎司教様が顧問司教となってくださることになりました。

今後も、ローマに本部を置く国際タリタクムの日本支部として、日本女子修道会総長管区長会および日本カトリック管区長協議会と協働し、社会司教委員会の「人権・平和・いのちの尊厳を守る」業務と連携し、現代の奴隷制度である人身取引の問題に取り組んでまいります。なお、事務局は、中央協議会にある男子・女子修道会宣教会の事務室に置かせていただくことになりました。

日本における人身取引の実態は、昨年11月にタイの12才の少女が、1ヶ月間売春を強いられた事実が明るみになり、メディアでも大きく取り上げられました。また、未成年の日本人の少女たちが、事実上、売春を余儀なくされる現実が、私たちの周りでも、日常的に起っていることが、明らかになっています。このような現実に対して、タリタクム日本は、これからも教育・啓発活動、シェルターを含む被害者支援、国内外ネットワークの連帯などを積極的に進めてまいります。教育・啓発活動では、特に、タリタクム日本のユース・アンバサダーとタリタクム日本の運営委員が、全国的にカトリック教育機関や教区への出前授業を展開しております。このために、今までよりも、皆様からの財政的な援助が必要になりました。カトリック・タリタクム日本としての口座をもうけております。ご寄付をよろしくお願いいたします。

三菱 UFJ 銀行 深川支店 (086)

普通預金 1058508 名義 カトリック タリタクムジャパン

現在の世界情勢によって、日本の経済も深刻な打撃を受け、私たちの日常生活にも影響を与えておりますが、このような現実によって、弱い立場にある人たちのいのちは、さらに脅かされています。教皇レオの言葉「貧しい人々への配慮は、主と出会うための根本的な道である」を、ご一緒に深め、実践できることを願っております。

12 歳タイ人少女人身取引事件

大東文化大学特任教授
一般社団法人「コラボ」理事
齋藤 百合子

2025 年 11 月に東京都文京区のマッサージ店で発覚した 12 歳のタイ人少女の人身取引事件は衝撃的だった。メディアには、少女が「違法に働かされていた」と表現した記事が一部あったが、意に反して男性客の性器を触らせるなどの行為は、違法就労ではなく、児童虐待だ。少女による性サービスの提供を受けた客の特定は難しくても、少児童買春・児童ポルノ禁止法や刑法の人身売買罪でも摘発されるべきではなかったか。しかし、店主は労働基準法と入管難民法の違反（不法就労助長）、そして少女をこの店に置き去りにした母親とブローカーのタイ人女性が児童福祉法違反の摘発に止まった。児童虐待や少女の性を売買の道具をしていることへの問題意識がほとんどないまま、翌年 1 月には少女が帰国し、ブローカーが逮捕された記事が小さく報道され、人々の関心は薄くなっている。

しかし、この 12 歳タイ人少女人身取引事件が私たちに突きつけるのは、人身取引は決して外国からもたらされた問題ではなく、より弱い立場に置かれた女性や子どもの性が商品化されて売買され、若者らが特殊詐欺など強制労働の搾取の対象にされるなど日本の私たちの周りで起きている人身取引問題に関心を持つことではないだろうか。

1990 年代の日本での人身売買（人身取引）

1990 年代、日本の性売買の苦海に放り込まれたフィリピンやタイからの女性たちの苦難が相次いだ。1991 年にはエンターテイナーとして来日したフィリピン人女性マリクリス・シオソンさんの事件が発生した。来日 5 ヶ月後に福島で「病死」として死亡確認され、故郷の家族の元に遺体を送られたが、遺族は遺体に残る外傷から事件性を疑い、焼却を拒否した。そしてフィリピンの NGO らと共に暴行の真相究明をフィリピン政府と日本政府に迫り、フィリピン国家捜査局は直接的な死因は頭部打撲によるものだが、火傷や太ももと性器への刺し傷から拷問と性的暴行の可能性を示唆した。しかし、日本政府は「病死」との見解を変えなかった。

同じ年の 1991 年には厳しい管理と暴力に耐えかねた人身取引の被害者であるタイ人女性 3 人が、スナックの中間管理職のタイ人女性を殺傷した事件が茨城県下館市（当時）で発生した。裁判では「（人身売買で）彼女たちの受けた苦痛は想像を絶するものがある」としながら、8 年の実刑が下された。「人身売買は報酬などない強制売春で強姦の連続」と主張した弁護側の主張は、買春を容認する日本社会では無視された。このような事例は、現在の人身取引対策以前に、受け入れ国として買春を容認しながら内包してきた搾取を示している。

現代の日本での人身取引

国連では 2000 年に人身取引議定書第 3 条で人身取引を、「搾取を目的」とし、騙しなどの「手段」によって、人を獲得し移送するなどの「行為」を伴うものと定義した。この議定書は 2003 年に発効し、国

連加盟国には人身取引対策が求められてきた。では 2003 年以降、日本の人身取引の状況は改善されたのだろうか。否、搾取の形態が多様化し、人身取引はますます見えにくくなっている。

警察庁のホームページでは、人身取引の被害には「性的サービスの強要」や「借金返済のため売春を強要される」、「恋愛感情を利用され他人との援助交際を強要される」、「家出した児童が性的搾取を受ける」などの実例を記している。東京の繁華街歌舞伎町を見ても、90 年代にはタイ人をはじめ女性ホステスによるサービスを売りにしていた店の多くの看板が、現在は、若い男性ホストらが待つホストクラブやメンズコンセプトカフェなどの看板の方が目立つ。こうした店が狙うのは、「推し」活などで恋愛感情を利用できる若い女性だ。警察庁は、2024 年の人身取引被害者は 63 名（58 人が日本人、その内 41 人が 18 歳未満）と公表しているが、その数は氷山の一角だろう。日本の社会では、「売春」行為を行う者（多くは女性）は「お金のため」に「自発的」に「自己責任」で行う人たちとのまなざしが強い。だから、暴力や搾取は「その危険も含めて自己責任」とされ、暴力や搾取の被害性を覆い隠されてしまう。

また、近年は搾取を目的とする犯罪組織によって日本人女性がカナダに移送されて人身取引被害に遭う事象も起きている。日本人女性のカナダでの人身取引の増加に対し、各国政府や NGO に注意喚起し、協力の可能性を考える、カナダ大使館主催シンポジウムが 2026 年 2 月に開催されたが、そこではカナダで性的搾取の人身取引被害に遭った 20 代の日本人女性の事例が紹介された。この女性の背景はわからないが、日本の若者の生きづらさは、死亡率が G7 諸国で飛び抜けて高い若者の自殺の傾向から少し読み取れるかもしれない。自殺はさまざまな要因が連鎖して、追い込まれた結果、発生する。厚生労働省の若年層の自殺をめぐる状況のデータからは若い男性の自殺は有職者に多いのに比べ、若い女性の自殺は有職・無職にそれほど差がない。統計上「有職」者であっても非正規雇用などの不安定な働き方の仕事を担っている人たちが少なくないし、「無職」とされる女性には、家事や育児、介護など、賃金が支払われないケア労働が含まれ、限定された人間関係の中で孤立や生きづらさにつながっている可能性がある。さらに、10 代の若い女性の場合、家庭の中でネグレクトなどの虐待で十分にケアを受けられず、居場所を失っていることもある。こうした社会的な孤立が、自殺や搾取の被害の契機となることもあるだろう。

さらに人との関係が希薄になり、SNS 情報を鵜呑みにしやすい若者を海外の犯罪拠点に誘い出して加害者に陥れる特殊詐欺（Scamming）が特に東南アジアで増加している。特殊詐欺は国際的には強制労働という形態の人身取引だ。タイやフィリピンでは、女性たちが騙されてミャンマーでの特殊詐欺に加担させられ、ノルマが果たせないと罰として複数回の強姦被害に遭った女性たちの救出が報告されている。日本の女性も被害に遭っている可能性もある。

さいごに

日本の人身取引は多様な形で私たちの身近に存在している。だからこそ、それを特別な出来事として遠ざけるのではなく、見えにくい苦しさの中に置かれている人々に目を向けことが求められる。若者の生きづらさや孤立に気づき、声にならない声に耳を傾けること、そして誰もが安心して生きられる関係と場を築いていくこと。そのような日々の営みの積み重ねこそが、人身取引を生まない社会への確かな一歩になるはずだ。

The International Day of Prayer and Awareness Against Human Trafficking に参加して

タリタクム日本ユースアンバサダー

西川 里加子

2026年2月に「The International Day of Prayer and Awareness Against Human Trafficking」がイタリア・ローマで開催されました。私はアジア代表としてこの特別なイベントに参加する機会をいただきました。このイベントはタリタクムの守護聖人である聖バキータの祝日（2月8日）に合わせて、毎年開催されます。今年のテーマは「Peace Begins with Dignity 平和は尊厳から始まる」です。尊厳とは何か、そしてその尊重と平和のために自分たちに何ができるのかという問いが、すべてのプログラムの中心にありました。特に印象的だった場面をいくつかご紹介します。



まずは、Walk for Humanity in Rome についてです。この啓発イベントは、タリタクムのアプリと連動し、昨年、日本のユースアンバサダーが発案し行ってきたものです。コロッセオエリアは世界的に有名な観光地の一つです。しかし、これらは奴隷とされた人々によって作られたことをご存知でしょうか。私たちはそんな場所を歩きながら、尊厳と自由が奪われた人々や、奴隷制を容認した社会について考え、意見を交換しました。



最終日の前日は Youth Day でした。各国のユースアンバサダー、タリタクム以外の団体からも多くの若者が集まりました。それぞれの国で実際に起きた人身取引のケースを、物語形式で語り合い、共有しました。サバイバーの体験を聞くことは、悲しみやショック、怒りなど、様々な感情を引き起こしました。しかし同時に、この体験は私たちに現実の厳しさを突きつけるとともに、自らの使命を改めて見つめ直すきっかけとなりました。フラッシュモブはあいにくの雨でしたが、サンタンジェロ城周辺を、平和へのメッセージを大声

で叫びながら歩きました。一人で声を上げることは簡単ではありません。しかし、同じ使命や目標を持つ仲間と一緒にあれば、この問題に立ち向かえると強く感じました。世界中の仲間との出会いは、かけがえのない心の支えとなりました。

現在も世界の至る所で戦争、紛争が起きています。戦争は目に見えて平和を壊すものですが、人身取引は人間の尊厳を傷付けることで、社会の内側から目に見えず平和を壊すものです。たとえ戦争がなかったとしても、そこに尊厳を傷付けられた人がいたとしたら、その世界は平和と言えるでしょうか。

私は今回、人身取引とは単なる犯罪ではなく、命と尊厳に深く関わる残酷な行為だということを再認識しました。法で取り締まれば解決するという簡単な問題ではないのです。だからこそ、サバイバーに寄り添うこと、人身取引を未然に防ぐための啓発活動、そして団結し祈り、行動することの大切さを実感しました。最後に、ローマで出会った全ての方々、私達を見守ってくださった聖バキータ、そしてこの機会を与えてくださった神様に心から感謝します。

シェルター活動の報告

カトリック・タリタクム日本運営委員

シスター宮脇道子（サレジアン・シスターズ）

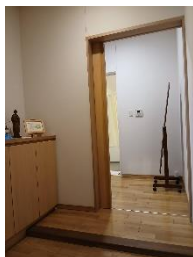
カトリック・タリタクム日本の活動の一つに、日本国内において、外国人技能実習生や移住労働者など、搾取の危険にさらされている人々の緊急一時保護のためのシェルター提供があります。全国の男女修道会の中から、受け入れ可能な修道院のリストに基づき、タリタクムを通して協力依頼が寄せられます。

2025 年度、私どものもとに、ベトナム人技能実習生 2 名、フィリピン人女性 1 名、インドネシア人女性 1 名の受け入れ依頼がありました。時期や期間、保護理由はさまざまで、問題解決まで数か月滞在された方や、妊娠中の方もおられました。

私どもが緊急シェルターとして実際に協力したのは初めてのことであり、言葉や生活習慣の違いに加え、心身に痛みや疲れを抱えた方々に、安心して休んでいただける環境を提供できるだろうかと戸惑いもありましたが、多くの学びを得る恵みの機会となりました。受け入れ先は、高齢のシスター方の介護を中心とする修道院で、シェルターのための専任の担当者や専用施設はありません。そのため、居室は共同体の食堂近くの一室を用い、食事と共にしました。利用者の方々は自然に「何か手伝わせてください」と声をかけてくださり、配膳や食器洗い、清掃などにも協力してくださる中で、次第に共同体の一員のような親しさが生まれました。

シェルター利用者の相談や対応、法的手続きなどはすべて依頼機関が担い、私どもは依頼機関との連絡窓口を 1 名、利用者本人との連絡窓口を 1 名置いたほかは、安心して過ごしていただける環境づくりを心がけました。それぞれの方の保護の経緯や背景についてはあえて尋ねず、困難の中にあることに心を寄せ、「お祈りしています」と声をかけるなど、共同体全体での配慮と温かな関わりを大切にしました。

シェルター提供への協力を通して、被害者救済のために真摯に問題と向き合い、解決に向けて骨身を惜しまず関わっておられる方々の存在を間近に知り、頭が下がる思いをもちました。また、インドネシア人女性のケースでは、インドネシアのタリタクムとの連携による支援が実現し、そのことを知った時には国境を越えたつながりの大きさに驚きを感じずにはいられませんでした。言葉や文化、考え方の異なる国から来られた方々が、日本での生活や仕事、人との出会いを少しでも肯定的に受けとめ、それぞれの歩みを進めていくことができるようお願い、これからもできる形で協力していきたいと思います。



（シェルターとして活用している部屋）

ともに学び・ともに歩む～タリタクム日本出前授業から

タリタクム日本運営委員

山岸素子

2025 年度も、タリタクム日本では出前授業を積極的に実施しています。

「人身取引」をテーマとしたコースでは、清泉女子大学、鹿児島純真女子短大、上智大学カトリックセンター、サレジリアン国際からのご依頼を受け、ユースメンバーが中心となって参加型の授業を行いました。

私が担当している「移民・難民」コースでは、清泉大学、静岡雙葉高等学校、不二聖心女子高等学校、名古屋の聖霊会修道院などで講義の機会をいただきました。

1 月には清泉大学上野キャンパスで、200 名余りの学生の皆さんを対象に。「いのちの哲学／いのちと社会」「女性と社会／ジェンダーと社会」の授業を担当しました。日本が難民を受け入れない理由についての質問があり、さまざまな意見の分かち合いとなったのが印象的でした。また午後の授業では、日本に暮らす移住女性の現状と支援についてお話ししました。すべての人のいのちが尊重される社会について、ともに考える大切な時間となりました。



静岡雙葉高等学校では、高校 2 年生の 140 名ほどの学生の皆さんに「共に生きる社会に向けて」をテーマにお話ししました。外国人に関する誤った情報が広がりやすい社会状況にも触れながら、互いを理解し支え合う社会について考える機会となりました。授業後に声をかけて質問してくれる生徒の姿も印象的でした。



また 2 月末には、名古屋の聖霊会本部修道院に招かれ、全国から集まれたシスター方に、日本の難民・移民の現状と教会の支援の歩みについてお話ししました。昼食の時間から活発な分かち合いが行われ、教区や修道会を超えた連携の大切さと希望を改めて感じるひとときとなりました。

こうした出会いの中で、ともに学びながら歩むつながりの広がりを心強く感じています。これからも多くの場で分かち合いを続けていきたいと願っています。



出前授業への思い

タリタクム日本ユースアンバサダー

中西 眞喜



台本と打ち合わせのとおりによればいいんだ、と自分に言い聞かせて緊張感をぬぐう。PCの動作にも、用意してきたパワーポイントにも不具合はない。台本もパワポもZOOM会議を重ねて準備してきたものだ。万全を期した。HDMIケーブルはすでにパソコンとプロジェクターの架け橋という役目を十分に果たしてくれている。だが、今度は自分が他の仲間たちと共に、別の架け橋にならねばならない。そう。不可視の世界を可視化して、聴講する生徒たちの意識をその世界へといざなう架け橋となるという、重要な責務が、我々の若い肩にのしかかってくる。

タリタクム日本ユースアンバサダーのメンバーは皆そのことを、意識せずとも承知している。我々の話を聴いてくれるのは、小学三年生の無邪気な子供たちだったり、将来に不安を抱く多感な高校三年生だったりする。悪を知らない児童に、あるいは受験地獄で悩み多き年頃の生徒たちに、より地獄的な世界を見せつけなければならないのだから、酷なことに思えなくもない。

講義室はいやに厳粛な空気に満ちる。無理もない。他人事じゃない深刻で複雑なテーマについて、こちらにはしゃべり続けているのだから。彼らは身じろぎもせずに耳を傾ける。何対もの視線がじっとこちらに注がれる。出前授業に駆り出された我々の技量を試している面接官のような冷たい眼差しもあれば、関心を呼び覚まされて、もっと知りたいと願う好奇の目もあったりする。子供たちを相手にするときはそれほどでもないが、高校生だとどうしてもそんな感じが拭えない。たぶん、無意識のうちに、若者が若者に講義するなんておこがましいにもほどがある、とどこかで自虐的に思っているからかもしれない。こんなことをして何になるんだ？一度ならず、そんなことを考えてしまう。

タリタクムユースアンバサダーというグループの存在を知ってから早三年。名前からしてカタカナばっかしだし、どこか得体のしれない雰囲気や漂う語感だなと思う。だが、タリタクムという言葉には、人知を超えた神秘的な力がある。「少女よ、起きよ！」二千年前、キング・オブ・キングスがこの言葉を口にして、子どもが死の世界から舞い戻った。このいのちの言葉を、生き地獄で苦しみ喘ぐ子供や女性たちに届けて、生きる喜びを呼び覚ましてあげたい。そんな願いを込めて、僕らはフレッシュな若者らしく、テンション高く、豪快に笑いながら、楽しいことを企画し、ドラクエみたいな感覚で仲間を増やして、たゆまず活動している。「地球の平和は人間の手で掴み取ることに価値がある」とウルトラシリーズは教えてくれた。それは福音を宣べ伝え、地上で神の御国を築くことと同じである。出前授業もまた、そのための手段の一つなのだ。

授業が終わり、コメントをもらおう。驚くべき一文が目飛び込んでくる！「僕たちもタリタクムに入りたいです！」無駄ではないんだ・・・！僕らは世界を救ってるんだ！

お知らせとお願い

カトリック・タリタクム日本は、2026年1月22日に設立総会を行い、独立した任意団体（日本カトリック司教協議会公認団体）として、名称も規約も新たにスタートしました。顧問司教として松浦悟郎司教様をお迎えしています。

タリタクムは女子修道会国際総長連盟（UISG）のプログラムの一つとして2009年に発足し、現在では人身取引、現代の奴隷制度を無くすために活動する修道者や協力者を結びつける世界的なネットワークになっています。カトリック・タリタクム日本の会員になって、ともに人身取引問題を考え、活動を支援くださる団体、個人をお待ちしています。会員には正会員と賛助会員があります。正会員は、カトリック・タリタクム日本の目的に賛同し、可能な限り活動に参加し、財政的に支援する団体または個人で、総会における議決権があります。当団体の運営、活動にご参加いただけます。一方、賛助会員は、私どもの目的に賛同し、可能な限り財政的に支援する団体もしくは個人で、総会における議決権はありません。入会をご希望の方は、当団体事務局にEメールでお知らせください。

私どもの活動は、皆さまからの寄付に支えられています。どうか当団体の活動をご理解いただき、下記の新口座にご送金くださいますようお願いいたします。

三菱UFJ銀行 深川支店 (086) 普通預金 1058508

名義 カトリック タリタクムジャパン

なお、取扱銀行変更に伴い、振込取扱票を事前に送ることができなくなりました。送金依頼人の情報も、カタカナ30文字に限定されます。つきましては、お手をかけて誠に恐縮ですが、ご送金後に、お名前、ご住所、振込日、ご寄付金額、領収書の要否、お名前の公表の可否、メールアドレスか電話番号（任意）を、以下のメールアドレスもしくは右のQRコードより当事務局にお知らせください。

カトリック・タリタクム日本事務局：japantalithakum@gmail.com



ご寄付いただいた皆様

下記の皆様より温かいご支援を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

イエズス会、援助修道会、カロンデレットの聖ヨゼフ修道会、汚れなきマリアのクラレチアン宣教修道女会、サレジオン・シスターズ（管区本部、大分修道院、扶助者聖マリア修道院、別府修道院）、シャルトル聖パウロ修道女会、聖体と愛徳のはしため礼拝修道女会、聖心侍女修道会、聖パウロ女子修道会、ベタニア修道女会、善きサマリア人修道会、その他10団体（五十音順、敬称略、2026年2月1日～4月27日）。

Catholic Talitha Kum JAPAN

End Human Trafficking



〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

日本カトリック会館内 修道会宣教会事務局

E-mail japantalithakum@gmail.com

FAX : 03-5632-4466